

大学院生VOICE

みやけ りょうすけ

三宅 亮輔さん

在校生

2025年度入学

2010年3月

星城大学

リハビリテーション学部卒業



遠方に住みながら仕事と両立して学んでいますが、オンライン授業のおかげで通学の負担を大きく抑えられ、無理なく受講を続けながら、着実に単位修得にも取り組んでいます。

授業ではスポーツ科学を幅広く学べるだけでなく、少人数ならではの環境で先生方や大学院生と積極的に意見交換をしながら、自分では気づかなかった視点や考え方に触れられることも多く、学びを深められる点が魅力です。

研究面でも、指導教員と密に相談しながら課題の一つひとつ丁寧に整理し、自ら考えて主体的に研究を進められている実感があり、充実した学びの日々につながっています。

みかみ のぶお

三上 信雄さん

修了生

2025年度修了

2008年3月

福井大学

教育地域科学部卒業



障害のある方の運動・スポーツに関心を持ち、特別支援学校で勤務をしながら、大学院で視覚障害児者の運動・スポーツ活動に関する実態や障壁について研究しました。

仕事と学業の両立は容易ではありませんでしたが、大学院で得た知見を日々の教育実践に活かすことで、大学院での学びをより深めることができました。また、物事を多様な視点で捉えて考える大切さを学び、現在も意識しています。

今後もアダプテッド・スポーツの研究や実践を継続するとともに、子どもたちが笑顔で運動やスポーツに親しめる環境づくりに努めていきたいと考えています。

やすい はるな

安井 晴菜さん

修了生

2023年度修了

2022年3月

日本福祉大学

スポーツ科学部卒業



高齢者スポーツに興味を抱き、大学院での研究を通じてその価値を深く理解しました。その後、健康づくりやトレーニングに関する商品を提供する企業に就職しました。

大学院での学びは、研究指導を通じて結果への筋道や根拠を重視する姿勢を身につけさせてくれました。これは私にとって、就職活動においてだけでなく、人生の決断においても重要な基準となりました。その結果、自分自身が真に価値を感じるものを追求する意志がより明確になりました。

大学院で培ったこの価値観は一生の財産となり、学生時代から現在に至るまで、さまざまな場面でその重みを感じています。

院生の研究テーマ・内容(例)

・研究テーマ「視覚障害児者の運動・スポーツ活動の実態と障壁に関する研究」

視覚障害児者373名を対象にスポーツ実施の障壁を調査。学齢期は内面的な障壁、成人期は時間等の外面的な障壁が顕著である実態を明らかにした。

「他者への依存」が共通の課題となる一方、盲学校が初期の人的ネットワーク形成に重要な役割を果たすことを示し、ライフステージに応じた支援の必要性を提言する研究内容となった。

・研究テーマ「女性パラアスリートにおける障がい・年代別 月経前症候群(PMS)の特徴」

女性パラアスリート114名を対象にPMSの実態を調査。有病率は14.0%で健常者と同程度であったが、月経痛やコンディション変化が競技パフォーマンスに強く関連することが判明。障がい特性や生活背景を踏まえた、パラアスリート特有の婦人科的支援の在り方を検討するための重要な基礎的知見を提供する研究内容となった。

・研究テーマ「アイススラリー摂取による車椅子ソフトボール選手の身体冷却効果」

暑熱環境下で活動する車椅子ソフトボール選手を対象に、アイススラリー摂取による身体冷却効果を検証。

通常の飲料より少ない発汗量で効果的に体温を低下させることが明らかになった。体温調節機能に制約がある身体障がい者にとって、簡便かつ有効な熱中症対策としての有用性を示唆することができる研究内容となった。

研究指導に関する流れ

入学前

- 希望するスポーツ科学領域の相談

1年次

4月

- 主指導教員・副指導教員決定
- 研究課題の決定、研究計画書作成

1月

- 研究計画書提出
- 研究計画書審査
- 研究倫理審査
- 研究計画発表会

2年次

4月

- 論文作成(データ収集)

12月

- 修士論文提出
- 修士論文審査・最終試験

- 修了審査結果の通知受領

3月

- 学位取得